Ｈ２９年度　厚生労働行政推進調査事業費補助金（慢性の痛み政策研究事業）
慢性の痛み診療・教育の基盤となるシステム構築に関する研究
分担研究報告書

難治性疼痛及び慢性疼痛に対する学際的治療の多面的評価に関する研究

研究分担者　門司　晃　　佐賀大学医学部附属病院精神神経科　教授
研究協力者　平川　奈緒美　佐賀大学医学部附属病院ペインクリニック・緩和ケア科　診療教授
研究協力者　園畑　素樹　　佐賀大学医学部附属病院整形外科　准教授
研究協力者　江里口　誠　　佐賀大学医学部附属病院神経内科　助教
研究協力者　國武　裕　　佐賀大学医学部附属病院精神神経科　助教
研究協力者　松島　淳　　佐賀大学医学部附属病院精神神経科　助教

研究要旨
本研究の目的は、慢性痛及び難治性疼痛に対する学際的アプローチの有効性と必要性を明らかにするために、その介入効果を多面的に評価することである。慢性の痛みを主訴に受診した患者５名に対して、介入開始時にBPI（簡易疼痛質問票）、PDAS（生活障害度）、 HADS（不安・抑うつ）、PCS（破局的思考）、PSEQ（自己効力感）、EQ-5D（健康関連QOL）による評価を行った。結果として、BPIとPDASの関連が示唆された。今後、統計学的に関連性を明らかにするために対象者を増やして検討していく必要がある。

A．研究目的

慢性痛及び難治性疼痛の診療および研究においては、個々の疾患分野や医療職種に限定されない学際的なアプローチが求められている。佐賀大学医学部附属病院においては痛みセンターチームを組織し、痛みの緩和を専門とする麻酔科ペインクリニック医（2人）だけでなく整形外科医（1人）、神経内科医（1人）、精神神経科医（2人）、さらには臨床心理士（1人）、理学療法士（1人）も含めた多職種で学際的カンファレンスを月に１回行い、通常の診療システムでは治らない慢性痛患者の治療方針を決定している。

本研究では、慢性痛及び難治性疼痛に対する学際的アプローチの有効性と必要性を明らかにするために、その介入効果を多面的に定量化することを目的とする。

B．研究方法

本研究は、2017年7月3日以降に慢性的な痛みを主訴として当院のペイン外来を受診した患者５名（目標は20名）を対象とした。痛みの評価にはBPI（brief pain inventory）、痛みに伴う生活障害の評価にはPDAS（Pain Disability Assessment Scale）を用い、不安・抑うつの評価には HADS（Hospital Anxiety and Depression Scale）、痛みの破局的思考の評価にはPCS（Pain Catastrophizing Scale）、痛みに対する自己効力感の評価にはPSEQ（Pain Self-Efficacy Questionnaire）、健康関連QOLの指標としてはEQ-5D（EuroQol 5 Dimension）を用いた。

本研究は、佐賀大学医学部附属病院臨床研究倫理審査委員会での承認を受けて実施し、研究の参加に関しては外来に研究内容を掲示し、参加を拒否できる機会を与えた。

C．研究結果

現在、実施中の研究であり、今年度は対象者が５名しか集まらず、統計解析をするには不十分なサンプルサイズであったため、散布図を作成し、各尺度と痛みとの関連の傾向をみるにとどまった。

結果としては、痛みの評価尺度であるBPIはPDASにおいてのみ関連がある可能性が示唆された（図1）。一方で、その他の尺度との関連は示唆されなかった。

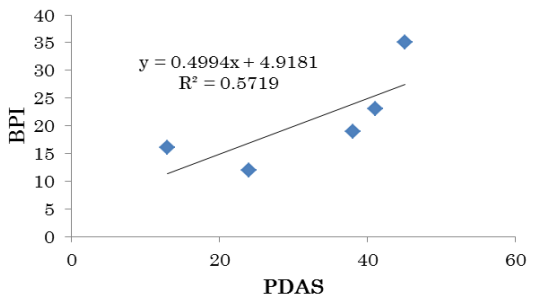

図1　痛みと生活障害度との関連

D. 考察

慢性痛は何らかの悪循環が生じてしまうことで痛みが遷延化している状態といえる。そして、慢性痛の悪循環が生じる構造としては Fear-avoidance model が知られており、痛みに対する不安や恐怖の回避行動として安静に過ごすことで活動量が低下してしまうことが痛みを慢性化することも明らかになっている。つまり、痛みが生活障害を引き起こす一方で、生活障害の程度が強くなることで、さらに痛みが維持されてしまうと考えられているのである。

本研究で BPI と PDAS との関連が示唆されたことは、慢性痛の Fear-avoidance model を踏襲している。また、そこでの悪循環を断ち切るためには、可能な限り患者の活動度を上げ、痛みを抱えながらも以前の日常生活に戻れるような治療や支援が必要であり、学際的なアプローチが求められる。

ただし、本研究は統計学的に関連性を明らかにするにはまだ対象者数が少なすぎる。そのため、引き続き対象者を増やし、BPI と PDAS との関連を再検討する必要がある。それと同時に、PDAS 以外の各尺度と痛みとの関連も検討する必要がある。また、学際的アプローチの介入効果を検討するためには、介入開始時の評価だけでなく、介入後の評価との比較検討も必要である。

E. 結論

慢性痛および難治性疼痛の患者に対して学際的アプローチの開始時に痛みだけでなく心理・社会面も含めた多面的な評価を行った。その結果、痛みと日常生活の支障度が関連している可能性が示唆された。ただし、まだ研究途中であり、今後は対象者数を増やして検討していく必要がある。

F. 健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載。

G. 研究発表

1.論文発表

なし

2.学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む。）

1.特許取得

なし

2.実用新案登録

なし

3.その他

なし

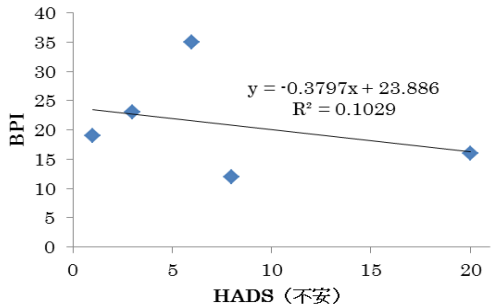

図2　痛みと不安との関連

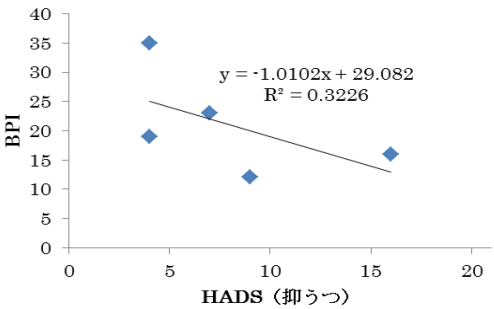

図3　痛みと抑うつとの関連

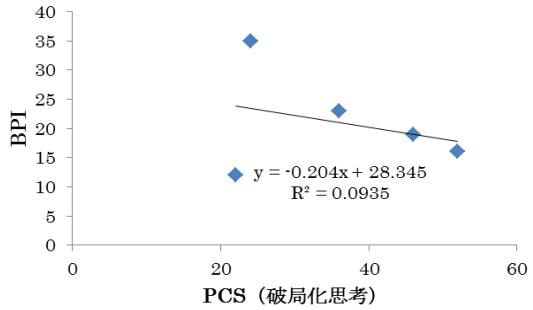

図4　痛みと破局的思考との関連

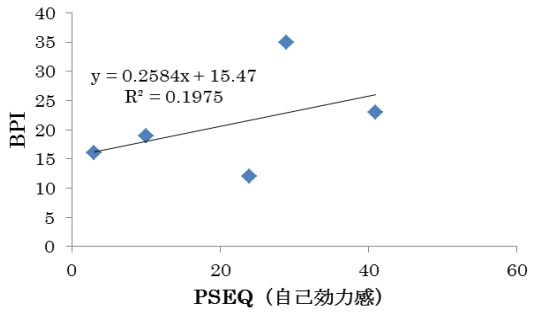

図5　痛みと自己効力感との関連

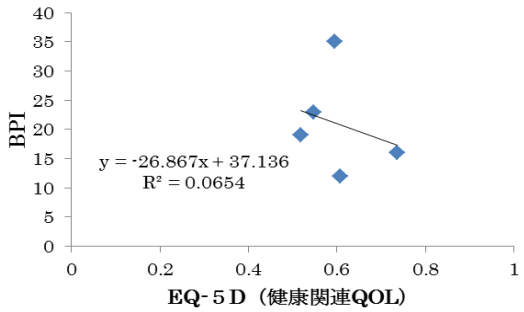

図6　痛みと健康関連QOLとの関連